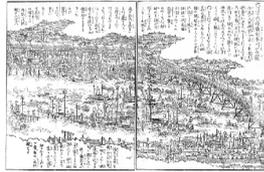


1. 水の都ひろしまの特性

歴史

都市づくりは水辺づくりであった

太田川デルタでは、16世紀末の毛利氏の築城以降、干拓と築堤という水辺との関わりの中で都市づくりが進められました。「都市づくりは水辺づくりであった」と言えます。



管弦祭のにぎわいの風景
 (「芸州殿島図会 卷之五」岡田清 臨川書店)

水辺はにぎわいの場所であった

水辺は昔から、人々の暮らしや遊びの場として賑わっていました。



台風17号 平成3(1991年)

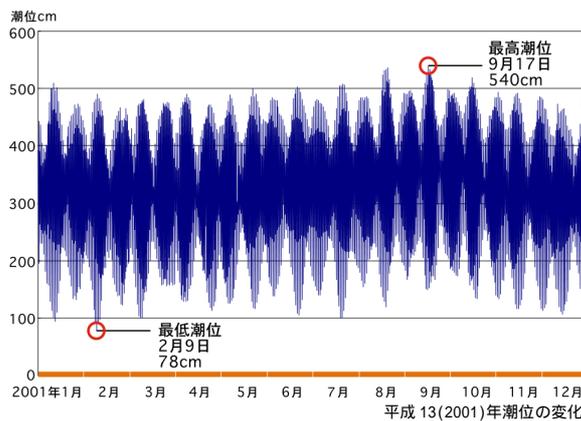
水害の歴史を繰り返してきた

太田川は水害の歴史を繰り返し、大規模な河川改修や高潮対策事業を進めて今日にいたっています。

水面

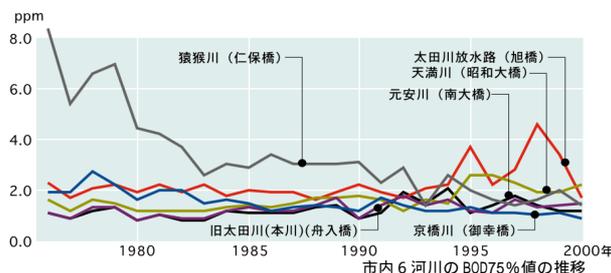
干満による潮位の変化が極めて大きい

干満による潮位の変化が極めて大きく、舟運などの障害になっている一方、水辺に変化のある景観をもたらしています。



都市河川としては良好な水質を維持している

太田川は都市を流れる河川としては良好な水質を保っています。



河川が市街地の高温化の緩和に貢献している

河川上で吹く海風が市街地のヒートアイランド現象の緩和に貢献しています。

広島海や川では漁業が営まれている

広島海や川では漁業が営まれており、身近に海や川での営みを感じることができます。



しじみ育成のための稚貝 放流

空間

水辺に多くの都市機能や観光・文化施設が立地している

都心部が河川に囲まれていることから、中心商店街や、駅、観光施設、文化施設などが多く水辺に立地しています。これらを活用して、水の都らしいにぎわいを創出できる可能性があります。



水辺に面する厚生年金会館

水辺は街の「きわ」になっている

川沿いの建物の正面が道路側に向いていることや、河川が区の境界、町の境界、学区の境界などコミュニティ境界となっていることから、水辺は街の「きわ」として意識されてきました。

変化に富んだ水辺がある

それぞれの水辺は、水に親しめる場所、眺望の良い場所、歴史的遺構のある場所、橋のある場所、分流点と合流点、漁業の風景など変化に富んだ表情をもっています。



水辺のシンボルとなっている基町環境護岸のポプラ

多くの個性的な橋がかかっている

広島市街地を流れる6本の河川には約80の橋が架かっています。個々の橋は歴史を感じさせる橋や、シンボル性の高い橋などがあり、市民に親しまれています。また、路面電車の走る橋が6橋あり、路面電車が川を渡る風景が広島を感ぜさせます。



水辺の歩行者空間が豊かである

水辺には豊かな緑地のある歩行者空間が連続して確保されており、快適に川沿いを歩くことができます。



美しく整備された河岸緑地

水辺に接する敷地も多い

水辺の土地利用は、水辺、緑地、道路などの配置によっていくつかのタイプに分類できます。この中で水辺に接する緑地や宅地は、水辺と緑地や建物との一体的な活用が可能であり、このような可能性を有する敷地も多くあります。

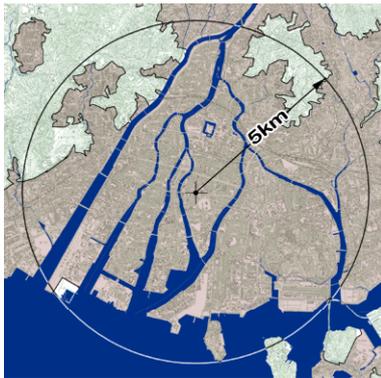
水辺の景観づくりを行ってきた

広島市においては、リバーフロント協議制度などによって、美しい水辺の景観づくりを進めてきました。

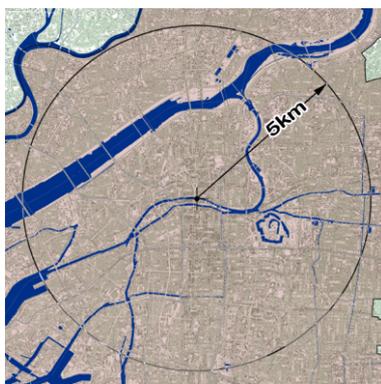
都市

市街地に占める水面の面積が大きい

太田川デルタでは市街地に占める水面の面積の比率が約13%と大きく、特に川幅の広い河川の多いことが特徴です。



広島市の水面の分布
(着色部分は人口集中地区)



大阪市の水面の分布(同)

水の都としての全国的な認知度が低い

これだけの条件を備えていながら、広島は「水の都」としての全国的な認知度は高くありません。

全体人口の4割弱が水辺に居住している

デルタ市民のうち、4割弱が水辺の近くに居住しています。



水辺から250mの範囲

デルタ人口を図の区域と仮定し、水辺から250mの区域に暮らす人口を試算するとデルタ人口の4割弱となる。250mは街区公園の誘致距離を目安として設定。

水辺利用

水上交通の気運が高まりつつある

海と川とを一体化させた水上交通の気運が高まりつつあります。



水上交通の社会実験

水辺は大いにつかわれている

水辺は散歩や休息、スポーツ、レクリエーションなどの場として日常的によく利用されています。最近はオープンカフェなどの利用も見られるようになりました。



水辺のカフェとパラソルチャラー

水の都広島の課題

本構想の目的にてらして、総括すると、以下の課題が指摘できます。

水の都としての特性が生活スタイルに生かされていない
水の都にふさわしい水辺空間の整備がまだ充分ではない
水辺利用に対応した仕組みやネットワークづくりが必要である